

夫婦間の性交渉の実態と第二子不妊について：

「全国調査仕事と家族 2007&2010」より

Revisiting frequencies of sexual intercourse among Japanese couples: On
conceiving the 2nd child

森木美恵 (国際基督教大学)、松倉力也 (日本大学)
Yoshie Moriki (International Christian University),
Rikiya Matsukura (Nihon University)
moriki@icu.ac.jp, matsukura.rikiya@nihon-u.ac.jp

当報告では、全国調査「仕事と家族」の2007年版と2010年版の両データを使用して、夫婦間の性交渉の頻度の第二子出生への影響を検証する。「セックスレス」夫婦の実態については、すでに2007年版のデータを使用して当学会においても報告を行ってきたが、後続データセットである2010年版データについては詳細な分析がなされていなかった。そのため、まず、2010年版データの特徴を精査し、2007年版データと比較し、そのうえで両データセットのケース数をプールしての分析が可能であることを確認した。日本の低出生問題を考えるうえで、夫婦間の性交渉の非活発性と二人目不妊の関係は重要な点である。報告者が過去に発表した知見によると、結婚している夫婦において、夫の労働時間数とともに3歳未満の乳幼児がいることがセックスレスの主な決定要因となっている。また、結婚して「家族になること」によって夫婦間での性交渉の意欲が薄れることも報告してきている。しかしながら、従来の2007年版データセットから使用できるケース数のみでは、統計的な処理において対象者の属性を絞って分析することが難しく、子どもがいることとセックスレスであること、そして第二子を得ることの関係性については詳細な考察ができていなかった。

そのため、今回の報告では、二つのデータセットを合体してケース数が増えた利点を生かし、すでに第一子を持つ回答者に限定した分析を行う。彼らの性交渉の頻度のみならず、特に、第二子を希望している夫婦の実際の性交渉の頻度や頻度への満足度にも焦点を当てる。また、すでに第一子を持つ回答者のセックスレス決定要因を検証する回帰分析も実施する予定である。予備結果からは、夫の年齢(35歳から39歳)、夫の労働時間数(週60時間以上)、夫の高収入、離婚リスクなどがすでに子どもがいる夫婦においてもセックスレスの要因になっていることが予測される。